

ニューエイジとエソテリズム (2)

——ハーネフラーフの『ニューエイジ宗教と西洋文化』

進 藤 英 樹

3. ニューエイジ宗教の諸相

1) 五つの特徴

『ニューエイジ宗教と西洋文化』¹⁾の第二部「ニューエイジ的経験の諸相」では、「現実の本性」「超経験的なものと人間精神の問題」「死と来世」「善と悪」「過去のヴィジョン」「ニューエイジ (新時代)」の各章において、ニューエイジ運動の諸相が、詳細に検討されている。その結果、ハーネフラーフは、ニューエイジ宗教に五つの特徴を確認し、第三部「ニューエイジ宗教と伝統的エソテリズム」の冒頭²⁾に、それらをごく簡潔に要約しているが、ここではまずそれらを紹介しておこう。

① この世志向、とりわけその弱い型は、ニューエイジ信者の、経験可能な現実に対する態度を特徴付ける。この点において、『奇蹟講座』のような著作は、往々ニューエイジの領域に属すると見なされるものの、決定的にこれと異なる。ニューエイジ運動における新異教のいささか問題的な立場は、新異教が強いこの世性をもつものに対し、弱いこの世志向は、ニューエイジ宗教の他の大部分の流れにおいて見られるという事実によって確認できる。

② 全体論は、ニューエイジ思考のあらゆる形式の中に浸透している。弱いこの世志向と一体となり、それは‘超越的、絶対的な’型であることはほとんどない。ニューエイジ全体論は、あらゆるものの宇宙的な相互連関性を強調する。そしてそれを共通の創造的な存在の源泉に基づかせる場合もあれば、そうでない場合もある。こうした種類のホーリズムは、等しく、コスモスの本姓についてのニューエイジの見方、および人間の、宇宙

と神に対する関係についてのニューエイジの信条の中心となっている。

③ 進化論は同様に、広く浸透している。ホーリズムの‘生成的な’型と一体となり、ニューエイジ信者は、進化を恣意的なことではなく、目的論的かつ、または、あるいは創造的なこととみなす。意識の進化の宇宙的な過程という考え、つまり魂が自分で計画された教訓を学ぶことにより進化を修得するという考えは、存在の意味、死後の生、そして倫理についてのニューエイジ信条の中心にある。さらに進化論は、宇宙、世界、人間社会についての議論において、中心的な位置を占める。

④ 私が宗教の心理学化および心理学の神聖化と言ったものが、そのさまざまな次元において、ニューエイジ宗教の著しい特徴をなす。進化論の文脈においては、それは意識の進化が完全なグノーシスあるいは照明に達し、そこでは自己実現と神実現とが同じ一つのこととなることを含意する。自分自身の進化を助長するために、精神は、教訓を蔵している‘意味のある幻影’を創造する。究極的には、すべての現実（内的領域、‘高次な’領域、ならびに‘通常の’現実）、精神によって創造される。われわれが‘われわれ自身の現実を創造する’というニューエイジの根本的な思想（これはまたさまざまな次元をもつ）は、この第四の傾向に直接基づいている。

⑤ 到来するニューエイジ、これは穏健な改革から全面的な至福の時代までの幅をもつが、こうしたニューエイジへの期待は、西洋文化一般において、またとりわけ近代西洋文化において支配的な世界観に対するニューエイジ運動の批判の直接的な表現となっている。こうした期待は、すべての宗教の核にあると見なされる‘久遠の真理’に対する信念に基づく神話的－歴史的枠組みに関して、表明されることもある。

以上が五つの特徴であるが、以下、彼の世志向とこの世志向、全体論、進化論、宗教の心理学化の問題を中心に、これらの特徴の一端を見て行こう。

2) 彼の世志向とこの世志向³⁾

ハーネフラーフは、ラヴジョイの『存在の大いなる連鎖』における‘彼の世志向’と‘この世志向’の区別を援用して、ニューエイジ宗教の現実に対する基本的な態度を検討する。ラヴジョイによれば、‘彼の世志向’は未来の生に対する精神の願望を言うのではない。そうした未来に対する願望は、逆に強いこの世志向を表している。つまりそれは、我々が変化、感覚、多数性、社会的親交といった世界において知っている存在様式の延長、ただし、地上的存在のつまらない、うんざりする性格は取り除き、すばらしい喜びは強め、現世における挫折の埋め合わせはする、そうした延長に対する願望なのである。これに対し彼の世志向は、「真に‘リアルな’もの、真に善なるものは、人間の自然な生活において、人間の経験、それがたとえどれほど正常で、知的で、幸運なものであれ、そうした通常の経験において見出されるいかなるものとも、本質的な性格において全く正反対の対照を示す。彼の世志向の哲学者たちによって考えられる人間の意志は、究極的な、確かで、確固とした、本質的な、完全に満足を与える善を、ただ単に求めるだけではなく、それを見出すことが出来る。とはいえそれは、現世においてではなく、ただ低次元領域とは、ただ単に程度や細部においてではなく、本質的な性格において異なる‘高次元’領域においてのみ見出されることが可能なのである。」⁴⁾

時間的、感覚的で、本質的に分割された世界に関しては、彼の世志向的な現実観は、次の三つのうちのいずれかの見方をするであろう。現世は幻影以上のものではない。これは一元的なヴェーダ哲学の場合である。あるいは現世はたしかにリアルではあるが、それは存在すべきではなかった、という見方である。これは古代後期の二元論的なグノーシス主義の立場である。それは世界の創造を災いと見なすのである。最後に彼の世志向的な人間は、世界の本性について議論することを拒否する。その世界からの救済という唯一の目的にはそれは重要なことではないからである。初期仏教がそのような例といえよう。

ハーネフラーフによれば、ラヴジョイのこの世志向の記述には、暗示的ではあるが、二種類のものが区別されている。つまりわれわれの経験世界そのものを重視する立場と現在の世界をモデルにはいるが、より良い現世を志向する立場である。ハーネフラーフは前者を強いこの世志向、後者を弱いこの世志向と名付ける。そしてさらに後者において現世は、この地上にあると見なされる場合（それは千年王国的な思想となろう）と死後の別の現実にあると考えられる場合とに分けられるとする。彼の世志向とは異なった弱いこの世志向の確認は、ニューエイジ宗教の性格を考える上でも、またハーネフラーフのニューエイジ論を見る上でも、重要と思われる。

次にハーネフラーフは、こうした現実観の区分が、ニューエイジ運動において、いかに適用されうるかを検討している。

強いこの世志向は、まず第一に新異教、とりわけ女神中心のそれに見られる。新異教は一般的に自然世界の美とすばらしさを強調し、精神の内的世界以外の非経験的現実にはあまり関心を示さない。新異教においてこの世志向の霊性を象徴する第一のものは、女神である。

一方、真の彼の世志向はニューエイジ運動においてはまれである。ほとんど唯一の例外は、『奇跡講座』⁵⁾であり、それは非二元論的なヴェーダンタのキリスト教版ということが出来る。われわれの世界は幻影の作り出したキマイラであり、暴力、悲しみ、苦痛以外の何もかも与えない。われわれは分離の悪夢から目覚め、神と再結合しなければならない。そうすればこの世界は存在することを止めるであろう。こう、そこでは述べられている。

多くのニューエイジ文献は、‘マーヤー’という東洋的概念をしばしば持ち出し、時間-空間の世界を究極的には幻影とするにもかかわらず、『奇跡講座』において見られるような断固とした現世拒絶に至ることはほとんどない。より普通の見解というのは、世界はたしかに幻影かもしれないが、それは意味のある幻影なのである。つまり、ただ単にそこから逃走し

たり、それを排除したりするのではなく、建設的にそれを使い、機能させるべきものなのである。こうして現世幻影観は、弱い現世志向に属することになる。彼の世志向の第二のタイプ、つまり‘グノーシス主義的’現世拒絶は、注目すべきことに、ニューエイジ思想には見られない。多くのニューエイジ文献が古代グノーシス主義を好意的に見るにもかかわらず、それは現世拒絶的な二元論を取り入れてははず、また時には明確に否定されている。また第三の仏教的なタイプは、『奇跡講座』において見られるとはいえ、ニューエイジ文献においてはあまり重要性はもたない。

ニューエイジ思想が全体として彼の世志向よりは強い現世志向の方に近いとはいえ、この運動においてもっとも典型的に見られるのは、弱いこの世志向である。これには上述したように二つのタイプが見られる。一つはより良き現世はこの地上にあるとするもので、もう一つはそうした存在は高次の領域にあるとするものである。後者においてもっとも典型的な考えは、この世界は完全ではないにもかかわらず、高次の現実には到達するための手段として、肯定的に位置づけできるというものである。ニューエイジ文献において地球次元に対する否定的見解がさまざまな程度において見られるが、それが極端にまで行くことはほとんどない。もっとも共通した見方によれば、物理的な現実、相対的に‘濃い’、限定された意識のレベルによって特徴づけられる。これは靈性のさまざまなレベルから成り立つ位階的構造をもった宇宙の存在を含意していよう。そこでは一方に純粹な靈、他方に濃度の濃い物質があるが、それらが強く分離された、正反対の原理というよりは、一つの連続体の両極なのである。我々自身の存在のレベルは、たいてい、最も低次の、最も物質的なもの間にあると見なされている。したがって地球での受肉は必ずしも愉快的な経験ではない。こうした不愉快さにもかかわらず、地球での生活は否定的に見られているわけではない。この世界は、学びと成長のための領域（しばしばこれは文字通りに学校と言われる）と見なされ、そこにある障害は、課題として対処されねばならない。

重要な点は、ニューエイジの作家たちが、地球での生活を憎んでいようが、あるいは愛していようが、またそのまま受け入れようが、それを大きな視野から見るといふ点である。学校が‘真の生活’の準備—しかし必要な準備—でしかないように、地球での生活はまたはるかに大きな進化過程の一段階にすぎないのである。地球での生活は大きな現実への踏み台と見なされなければならない。それがわれわれが十分に地球での生活を経験せずに、それを後にすることが出来ない理由である。強い現世肯定の要素や現世否定的な要素は、成功の度合いはさまざまとしても、時にこの学校的見方のうちに入れることが出来るかもしれない。しかしたいの場合、見られるのは、肯定的な精神で向き合うべきものとして日常の現実を受け入れる態度であり、その背後には、そうした地球での相対的に限定された存在に意味を与える大きな宇宙的な生が考えられているのである。

結論として、ハーネフラーフは、次のように述べている。彼の世志向の思想と現世拒否は、少なくとも強い形式では、ニューエイジ思想には典型的なものではない。全体として、ニューエイジ信奉者は、完全にか、あるいは若干両義的であるかはともかく、この世志向的である。そして弱いこの世志向の形が支配的ではあるが、しかし強い形のものも、弱いこの世志向のニューエイジャーからでさえ、是認されうる。

3) ホーリズム⁶⁾

存在のあらゆる次元において全体性への探求がニューエイジ運動の最も中心的な関心事の一つであり、またホーリズム（全体論）という語が重要なキーワードであることは、疑い得ないであろう。しかしハーネフラーフは、まず、ニューエイジの文脈ではこのホーリズムという語が何らかの明確に定義づけられた理論ないしは世界観を表明しているのではないことを強調する。この語を使用した多くの表現を結びつけている唯一のものは、旧文化と結びついた非ホーリズム的な見方と感じられるもの、つまり、ニューエイジ運動がそれにとって代わろうとしているもの、あるいはそれを変容させようとしているものに対する共通な反対である。ハーネフラーフ

によれば、こうした非ホーリズム的な行き方は、せんじ詰めれば、二元論および還元主義といわれうる二つのカテゴリーに帰着する。

ニューエイジ運動がその全体論的なオルタナティヴを發展させようとする二元論および還元主義の主要な形式は以下のようなものである。1. 創造者と創造、すなわち神と自然との、また神と人間との根本的な相違。；2. 人間と自然との相違、それは伝統的には前者による後者の支配という関係において考えられてきた。；3. 霊と物質との二元論、それはキリスト教的禁欲主義からデカルト的の二元論までの様々な形態を含む。一般にニューエイジ運動においてはこうした二元論的傾向は結局のところ西洋文明のユダヤ・キリスト教的な根に基づくとみなされる。

還元主義はより新しく出現を見たもので、科学革命や近代的な合理主義精神と結びつく。その主要な形態は以下のようなものである。1. 断片化の傾向、つまり有機的な全体を、その最小の要素に還元し、その要素から、逆に有機体を説明しようとする傾向。；2. 霊を物質に還元しようとする傾向、その結果霊は単に本質的には物質的な過程においてたまたま見られるようになった随伴現象にすぎないものとなる。

これら五つのどの領域においてもニューエイジオルタナティヴは全体論的といわれるものである。これらオルタナティヴに共通な性格というのはただそれらが体系的に二元論と還元主義を避け、それに代わろうと試みている—成功の程度はさまざまであるが—とすることだけである。

ハーネフラーフは、この意味でのホーリズムが、ニューエイジ運動に浸透しているとし、ホーリズムの主要な構造上のタイプを四つに分ける。つまりすべての顕現が、一つの“究極的な源泉”に還元されるという可能性に基づくタイプ、宇宙にあるすべてのものが全宇宙的な相互連関のうちにあるという考えに基づくタイプ、相互補足的な両極間に見られる宇宙的な弁証法に基づくタイプ、現実の、あるいは重要な下位システムの全体と有機体との類比に基づくタイプの四つである。ハーネフラーフによれば、ニューエイジの文脈においては、前二者のタイプが重要であるとし、詳述し

ているが、ここでもその二つのタイプについて見て行くことにしよう。

A. 顕現の究極的な源泉⁷⁾

万物は結局一つの“究極的な源泉”から派生している、という考えが、ニューエイジ運動において見られる。顕現の世界で見出されるきわめて多様な現象は、深い次元においては、共通の起源によって互いに関連づけられているにちがいない。このすべての存在者の源泉が、現実の究極的な全体性を支えている。そしてこの源泉は、不可避的に、神と見なされる、あるいは直接神と結びつけられる。

ここでハーネフラーフが注目するのは、トレヴェリアンやシェルドレイクといった人の発言に、“究極的な源泉に基づくホーリズム”の性格をかなり複雑にする内的な両義性が見られる、ということである。あきらかに汎神論的傾向をもったトレヴェリアンの文章は、また源泉が時間のない領域に住むと述べる。シェルドレイクは、源泉に参与する創造とか、源泉を反映する創造を言うが、しかしながらその源泉は超越的なのである。言い換えれば、超越と内在双方ともに、程度の違いはあれ、肯定されているのである。

これに関しハーネフラーフは、またラヴジョイを援用する。

「プラトン主義の根強い影響の最も注目すべき結果は、西洋の宗教が、その歴史の大部分を通して、より哲学的な形態において、二つの神をもったということである。この二つの神は、実際、二つの側面をもった一つの存在と見なされた。しかしこの側面に対応する観念は、二つの正反対な種類の観念なのであった。一つは、彼の世性に属する絶対者であり、自己充足しており、時間の外に存在し、通常の人間の思考や経験に属するカテゴリとは無縁であり、その完璧に自立した永遠なる完全性を補ったり、強めたりするのに、低次の事物の世界を必要とはしなかった。もう一つの方は、自己充足せず、いかなる哲学的意味においても、絶対的ではなかった。つまりその本質的本性が、他の存在者を、しかもただ一種類の存在者だけをというのではなく、現実の下降するさまざまな段階において場所を

しめるあらゆる種類の存在者を必要とするような神、その第一の属性が、生成であり、その顕現が、被造物の多様性のうちに、したがって時間的秩序や自然の諸過程の多様な光景のうちに見出されるような神なのであった。」⁸⁾

これに続けてハーネフラーフは述べている。自己充足している絶対者にして存在の生成的な源泉としての神というこの逆説は、一つの同じ伝統において結合され、究極的な価値についての広範に見られる曖昧さを生み出した。換言すれば、彼の世志向とこの世志向という広く行き渡った二元は、徹底的に超越的なものとしての、あるいは創造に内在するものとしての究極的な現実／神という二つの概念の二元と並行しているのである。ラヴジョイの研究は、西洋の知的、宗教的歴史におけるこの二つの矛盾し合う潮流の簡単とはいえない結婚の様を描いている。

ところでニューエイジ思考の彼の世志向よりはこの世志向を考慮すれば、生成的源泉としての神の概念が、自己自足的な神のそれより一般的であると言うことは、予想できようし、また事実そのとおりになっている。創造神話はその明らかな例といえよう。しかしながら二つの神の両義性が現れるのである。ハーネフラーフは、とりわけこの点に留意しながら、セスの描くコスモス像を詳述しているが、以下、それを見てみよう。

生成的源泉という原理はさまざまな霊性の次元から構成される階層的なコスモス、さまざまな霊的発展のレベルにある知的住民によって住まわれているコスモスという観念を作り出す。こうしたコスモス観はニューエイジ思想においてしばしば見られる。すべての知的存在は霊的進化の過程に従事しており、究極的には究極の源泉へと帰還することになる。ここでラヴジョイによって分析された両義性に再び出会うことになる。つまりこれらの知性は究極の源泉から下方への、あるいは外への生成的過程において流出するが、それらが創造を超越している源泉へ上昇する、内面への旅を始めるのである。とりわけ弱いこの世志向の代表者は、こうした問題に気付くことなく創造のすばらしさとそれを超越することの必要とを同時

に肯定することが出来る。その場合よく見られる解決法は、未来の進化の可能性が無限であると考えることである。つまり進化とは創造的拡張の無限の過程なのである。

セス（ジェーン・ロバーツがそのチャネルとなったエンティティ）においては存在の偉大な目標は、人間にとって、神と共に創造者であることを明確に意識するようになることである。ここにはホーリズムとならんで‘われわれ自身の現実を創造する’というニューエイジ思想の第二のテーマが見られる。セスによればわれわれ自身の存在は創造的エネルギーから成り立っており、われわれを通してのみあるところのすべて、つまり神は顕現した現実を創造するのである。したがってわれわれが意識するしないにかかわらず、われわれはつねにわれわれの現実を、息をするのと同じように創造しているのである。現実の本性はわれわれの意識的、無意識的信念の直接的な反映である。われわれの多くが世界に関し制限された信念をもつがゆえに宇宙はこの確信通りになるのである。しかしながらわれわれがその信念を変えるならば、それによって現実が変わることをわれわれは見る。実際、もしわれわれが可能であると信じさえすれば、われわれが想像し、現実化することが出来る現実には制限はない。こうしてあるところのすべてである生成的源泉から流出する多くのレベルからなるコスモスは、実際宇宙の創造的エネルギーに参加する個々のエンティティによって創造された現実から構成されている。現実のレベルはそれらエンティティが自分自身の潜在能力にどの程度目覚めているかにかかっている。人間は自分自身の創造した夢の中に生き、物理的現実の一見したところの安定性は、同じ現実を信じている多くの個人の間主観的一致に条件付けられているのである。

セスの世界観は、こうして究極的には現実が幻影的な性格を持つとする観念が、この世志向的な見方の中に収まる典型的な例である。伝統的な東洋のマーヤー観は、この世界の幻影は究極の真の彼方に到達するためには、追い払われねばならないとするものである。セスのきわめて対照的な

見方においては、現実が自らが創造した幻影だという認識は、さらによい現実を創造するという励みとして有用なのである。幻影から逃げるのではなく、神の創造は信じがたいほどに豊かで目もくらむような想像的世界のカレイドスコープとして存在する。これらの世界は十分に楽しむために、またいっそう美しく、多様であるためにそこに存在する。彼の世的な絶対者の名の下にそれらは追放されるべきではない。このセスの中心的なメッセージはニューエイジ運動に大変強い影響を与えた。多くの作家においてそうした見方を見ることが出来る。とはいえセスの定式を特徴付ける知的厳格をもって発展させている場合はほとんどない。セスが一貫している証拠は、神の創造的拡張の無限性の主張である。こうした無限性は、ただ単に個人の進化の、彼の世的な最終目的地としての神のイメージを避けるためばかりでなく、創造性の本性がまさに必然的に含意するものなのである。究極的には完成した、仕事を終えた神、あるいは、あるところのすべては、創造の息の根を止めてしまうことになろう。完成というのは、そこを越えては発展が不可能な点、創造が終わる点を前提するからである。創造的想像力の優位さに基づくセスのロマン主義的宇宙論においては完全に自足的な、したがって彼の世的な絶対者がはいり込む余地はない。

ハーネフラーフは、セスの現実に対する見方に特別の注目を払った理由として、それが生成的源泉ホーリズムが最も高度に発展させられた典型となっているからである、という。ここには生成的源泉から流出する階層的なコスモス（伝統的なプラトンの概念）が、(SFをおもわせるような)多次元的で、創造的に拡張する世界の無限性への現代的な強調と結びつけられている姿が見られる。しかもその世界は（神的な創造性に参与している）住人の意識的、無意識的信念に基づいた想像力によって創造されるのである。これらはニューエイジ運動の主要領域にとっての基本的教義である。セスのニューエイジ思想の展開における中心的な役割に関しては、これまで研究者によって十分に認識されなかった。啓示という観点から見れば、セスのメッセージは、ニューエイジ運動にとって基本的な啓示的

源泉と見なされなければならない。セスのチャネルであるジェーン・ロバーツをニューエイジ宗教のムハンマドと、そしてセスをその天使ガブリエルと見なすのは、決して言いすぎにはならないであろう⁹⁾。

B. 宇宙的相互連関性¹⁰⁾

究極的源泉ホーリズムにおいて宇宙のすべてのものは、同じ源泉に参与し、同じ源泉から流出するがゆえに、それらはほかのすべてのものと連関し合う。この姿は、源泉を頂点とし、その唯一の中心から扇状に多様な顕現が展開するピラミッド型の階層として、あるいは、源泉が中心にあり、そこから太陽の光線のようにさまざまな顕現が放射される階層としても描かれよう。しかしハーネフラーフのよれば、ここで言われる宇宙的相互連関性というのは、この究極的源泉ホーリズムとは、厳密の区別されねばならない。それが、源泉、あるいは、その他の特権を持った中心の不在によって性格づけられるからである。それに相応しいイメージは、すべての点が他のすべてのポイントと結びつけられているが、しかしどの点も特権的な地位を占めないネットワークのイメージである。こうした特権的な存在論的地位をもった源泉の欠如から生じる重要な帰結は、宇宙的相互連関性が明らかな一元論的性格をもつ傾向にあるということである。この種のホーリズムは、宇宙の究極的な起源に関する問題よりは、その現在の本性や構造に関する問題により関心が払われる。こうした実際的な関心を考えるならば、宇宙的相互連関性という意味でのホーリズムの根本がニューエイジ科学の領域で見られるということも、おそらく驚くことではないであろう。このタイプのホーリズムの代表として、ハーネフラーフは、いわゆる並行論、システム論のカブラ、ホログラフィー・パラダイムのプリブラムおよびボームを挙げ、詳述している。

a. 並行論とブートストラップ哲学¹¹⁾

『物理学のタオ』¹²⁾において、フリチョフ・カブラは現代物理学—とりわけ量子力学—と東洋の神秘主義との間には重要な並行関係があると主張する。ハーネフラーフによれば、カブラの中心的なテーゼは、「世界に関

する一貫した見方が、東洋の知恵と調和する現代物理学から出現しつつある」というものである。現代科学が神秘主義の正しさを証明するということを言っているわけではない。カプラが言うのは、東洋の神秘主義が現代科学の理論に重要で一貫した哲学的根拠を与えてくれるのではないかということである。神秘主義の正しさの証拠を提示するというよりは、並行論の重要さは、現実の本性に関する現在の非ホーリズム的（つまり二元論的還元主義的）仮説に対するその潜在的な批判である。ここでハーネフラーフが問題にするのは、並行論が正しいか否かということではなく、カプラが擁護する世界観の本性が何かである。ハーネフラーフによれば、カプラのホーリズムは二つの重要な特徴をもつ。第一は、あらゆる現象の統一と相互関連性であり、それは相互に結合された諸関係の網の目としての宇宙観に達する。第二は宇宙の固有なダイナミックな本性である。こうしたホーリズムの典型的な例として提出されているのが、物理学におけるいわゆるブートストラップ理論である。

このブートストラップ理論は、量子力学の研究結果を説明するためにの哲学的背景として、物理学者のジェフリー・チューによって作られたものである。カプラは、この理論の本質について次のように述べる。「ブートストラップ理論によれば、自然は物質における建築用土台ブロックのような基本的な存在要素に還元され得ず、完全に自己調和的なものと理解されねばならない。すべての物理学は、その要素が互いに、そしてまた自分自身と調和し合っているという要請に従わねばならない。これはつねに物質の基本的な要素を求めることに向かっていた物理学における基礎的研究の伝統的精神からの完全な決別を意味する。同時にそれは量子力学から出現した相互関連した諸関係の網の目として物質的世界を見なす観念の頂点をなす。ブートストラップ理論は、物質における建築用土台ブロックといった概念を捨て去るばかりでなく、いかなる基礎的な存在要素、いかなる基礎的な常数、法則、等式も受け入れない。宇宙は相互関連する出来事のダイナミックな網の目としてみられる。この網の目のある部分の性質が、基

礎的なものということはない。それらはすべて他の部分性質から生じ、これらの相互連関の全体的調和が、網の目全体の構造を決定するのである。」¹³⁾

ここにあるのは最も徹底した意味における宇宙的相互連関性に基づく物理学的な現実観である。亜原子のレベルで宇宙のすべてのものは文字通り他のすべてのものと関係し合う。しかしながらハーネフラーフは、ここでいくつかの疑問がすぐに浮かぶことになろう、という。まず第一にこれは絶対的な決定論ではないかという疑念である。次に問題なのは、ブートストラップホーリズムはもっぱら物理学的現実を扱うのであって、霊的なものを受け入れる余地がないように思われることである。さらに究極的な亜原子レベルにおける相互連関性が、現象世界における肉眼で見えるような人間生活にいかなる意味をもつかということも問題となろう。ところでこれらの疑問は、カブラ自身が感じた疑問でもあった。カブラは述べている。「新しい医学、新しい心理学、新しい社会科学のモデルとして新しい物理学を提示することによって、私は、自分が避けようとしていたデカルトの落とし穴に落ちてしまったのである。」¹⁴⁾物理学を他の領域のモデルとして提示するということは、物理学的現象が、第一の現実、他のすべてのものの基礎であるということを含意していよう。換言すれば、ブートストラップホーリズムは、一種の唯物論的な還元主義になってしまったのである。こうしてカブラは、もはや他の科学のモデルとして新しい物理学を提示するのではなく、はるかに一般的な枠組み、つまりシステム理論という枠組みの中の一つの重要な領域として新しい物理学を提示しようと試みる。そして次の著作『転回点』において、それらに答えることになるのである。

b. システム思考¹⁵⁾

一般的なシステム思考は、自然、社会的現実、工学的製造品といった明らかに異なった領域の間に何らの基本的な相違を作らず、これらの領域におけるその基礎的、分析的概念として〈システム〉を導入するが、この

〈システム〉は、その構成要素である部分の総和以上である全体として定義される。一般的なシステム思考は、分離した単位間の機械的な相互作用によってシステムを説明するのではなく、関係の全体的パターンを強調する。その際とりわけ重要になってくるのは、情報という概念である。しかしながらハーネフラーフによれば、この一般的なシステム思考のホーリズムとでも称すべきものは、ニューエイジ運動に特定の関係をもたない。したがってカブラがいうところのシステム理論というのも、かなり独特なものであり、実際それは二人の思想家グレゴリー・ベイトソンとイリヤ・プリゴジンの思想をミックスしたものに他ならない。

ハーネフラーフは、カブラがベイトソンに惹かれた理由として、第一にベイトソンのシステム思考の全体的一元的、ホーリズム的性格がブートストラップ哲学にふさわしいものであったこと、第二に、さらに重要なことであるが、ベイトソンがデカルト哲学のディレンマからの脱出口を見出したように思われたことを挙げている。つまりベイトソンの精神の定義は、精神と自然が必然的な統合を形成するというを示すことにより、精神と自然の問題に関し完全に新しい視点を可能としたのである。『転換点』においてカブラは新しいシステム観は、現実のすべての領域を包括し、したがってそれが通用するようになれば、新しい社会を招来することになると指摘する。「現実の新しいヴィジョンはあらゆる現象、つまり、物理学的、生物学的、心理学的、社会的、文化的現象の本質的な相互連関性と相互依存性に気づくことにかかっている。それは現在の学問上の、概念上の境界を越え、新たな機関において追求されることになる。」¹⁶⁾ここではチューのブートストラップ物理学をモデルとした説明がなされているとはいえ、ブートストラップ理論は生命の一般システム的な見方の一例とされる。「システム理論は世界を関係と統合という言葉で見る。システムは統合された全体であり、その特性はその全体のより小さな単位の特性には還元し得ない。基礎的な建築用ブロックや基礎的実体を追求する代わりに、システム理論は基礎的な組織化の原理を強調する。」¹⁷⁾そして『物理学の

タオ』において強調されていた全体性の二つの特徴、つまり相互連関性とダイナミックな性質とが、このシステム論の基礎とされる。「すべての自然のシステムは、その特定の構造が部分の相互作用と相互依存性から生じるような全体である。……またもう一つのシステムの重要な側面は、その固有なダイナミックな性質である。その形態は硬直した構造ではなく、柔軟ではあるが安定した根底にある過程の顕現である。システム思考は過程思考であり、形態は過程と、相互連関は相互作用と結びつき、反対のものは振動によって統合されるのである。」¹⁸⁾

このシステム思考を展開するに当たり、カプラはプリゴジン学派によって使われ、エーリヒ・ヤンチュによって擁護された〈自己組織化〉の概念を援用する。これは何かが生きているか否か、生きたシステムであるか否かの判定基準として使用されるものである。ハーネフラーフはこの判定基準のうち最も重要なものを四点挙げている。1. 機械が、機能するために周囲の環境との相互作用するを必要ない閉じられたシステムであるのに対し、生きたシステムは開いたシステムである。生き続けるために、生きたシステムは周囲の環境との物質およびエネルギーの交換を絶えず行う必要がある。2. この交換過程が、システムを絶えず非均衡の状態に置くことになる。反対に均衡状態にあるシステムは、死んだシステムである。3. それにもかかわらず、生きたシステムは高い安定性を示す。これは均衡状態にあるシステムが示す静的な安定性ではなく、ダイナミックな安定性である。4. 生きたシステムは、自己更新が可能である。それは損傷を修復し、変化する環境に対応することができる。そして多くのシステムは、死に対処するため、超修理の方法を発展させさせた。これはもちろん有機的な世界においては性的再生産といわれるものである。こうした生きたシステムの定義のための判別基準が含意する極端さは、たとえば都市などの社会組織や、経済などの抽象的なシステムもまた今や生きたものとみなされねばならないことを悟るや否や、明らかとなる。プリゴジンとバイトソンを結びつけるカプラに従うならば、われわれはいっそう極端な結論を

導き出さねばならない。つまり都市も経済もただ生きているだけではなく、精神をもつのである。

ハーネフラーフによれば、カプラのシステムの生命観の発展における決定的な一歩は、カプラがプリゴジーンの自己組織化（生命）の判別基準がベイトソンの精神の判別基準ときわめて類似していると考えたときに可能となった。プリゴジーンとベイトソンのシステム論を結合することにより、すべてのものは収まるところに収まった、とカプラは述べている。この二つの判別基準が構造的に類似しているというカプラの結論が正しいのか否かということはここでは問題ではない。問題なのはベイトソンの哲学そのものというより、カプラのベイトソン解釈である。

「グレゴリー・ベイトソンは、精神を生きた有機体、社会組織、生態系などに特徴的なシステム現象として定義することを提起した。そして精神が生じることを可能にするようなシステムの判別基準を提出した。これらの判別基準を満足するいかなるシステムも情報を処理し、われわれが精神と結びつける諸現象、つまり、思考、学習、記憶などを展開することが出来るだろう。ベイトソンの見解では、精神はある種の複合体の必然的で、不可避的な帰結であり、それは、有機体が脳や高度な神経組織を発展させるずっと以前に始まったものなのである。ベイトソンの判別基準は、私が機械と生きた有機体間の決定的な相違として挙げた自己組織化するシステムの諸特徴と密接に関係していることが判明した。実際、精神は生きたシステムの本質的な特性である。ベイトソンが言ったように、『精神は生きていることの本質』なのである。システムの観点から言えば、生命は実態や力ではなく、精神は物質と相互作用を行う存在ではない。生命も精神も一連のシステムの諸特性の顕現であり、自己組織化のダイナミクスを示す一連の過程の顕現なのである。この新しい概念は、デカルト哲学的区分を克服するわれわれの試みにおいてすこぶる有用である。組織化のパターンあるいはダイナミックな一連の諸関係としての精神の記述は、現代物理学における物質の記述と関係し合っている。精神と物質は、デカルトが

信じたように、もはや二つの別な基本的カテゴリーに属することはなく、同じ宇宙的過程の単に異なった側面を示すと見なしうるのである。」¹⁹⁾

精神の次元を一般システムの生命観のうちに取り込むことにより、カプラはいまや宇宙的相互関連性に基づくホーリズム的世界観の基礎を作り上げることになった。それは物理学のブートストラップ哲学に基づく初期のモデルに比べ、はるかに広範囲の現象を包括する。生きたシステムと現実の全体とは、層状の秩序の概念によって関係づけられる。「多元的構造—各レベルは異なった複合性をもつ—を形成しようという生きたシステムの傾向は、自然全体にくまなく認められ自己組織化の基本的な原理と見なされねばならない。複合性のそれぞれのレベルにおいてわれわれは、統合された、自己組織化する全体に出会うが、この全体はより小さい部分から成立すると同時に、より大きな全体の部分として機能する。」²⁰⁾ システムの内部のシステムという考えは、無限に小さな方向にも、無限に大きな方向にも展開されうる。

「自然の層状の秩序においては、個々の人間の精神は、より大きな社会的、生態系的システムの精神の中に埋め込まれており、これらは惑星の精神のシステムに統合されているが、しかしこれはこれで宇宙的、コスモス的な精神の一部となっているのである。新しいシステム理論の概念的枠組みは、このコスモスの精神を伝統的な神の観念と結びつけることにより、制限されることは決してない。ヤンチュの言葉によれば、神は創造者ではなく、宇宙の精神なのである。こうした見方に立てば、神性はもちろん男性でも女性でもなく、いかなる人格的な仕方でも顕現せず、全コスモスの自己組織化するダイナミクス以外の何ものでもなくなるのである。」²¹⁾ ハーネフラーフは、この神学を完全に一元論的な意味において汎神論的と名付けることに反対する理由はさしてない、と言う。ただし精神（神）が一つの実体ではなく、関係の抽象的なパターンとしてみられていることが十分に実現されている限りにおいてである。これは少なくともベイトソンの考えであった。しかしハーネフラーフは、カプラがこの考えに完全に忠実

であるか否かに関しては、疑問が残るとし、次のように結論づける。いずれにせよ神が現実の究極的な源泉として考えられていることを示唆するのは何もないことに注意しておこう。神は宇宙のうちに完全に内在しており、自己組織化のダイナミクスそのもの、バイトソンの言葉では、関係づけるパターンなのである。

c. ホログラフィー・パラダイム²²⁾

ホログラフィー（干渉性の光による物体の記録再生技術）はもともと物体の三次元的再現を作る技術である。レーザー光線が写真版に二つの光源からあてられる。つまり一つの光源は、物体によって直接反射された光線であり、もう一つは、物体から鏡を介して写真版に反射された光線である。この二つの光線の写真版上の干渉見たとこ無意味な渦、いわゆる〈ホログラフィックなぼやけ〉を作りだす。このぼやけは、物体には何らの類似性もたない。しかしながら、レーザー光線が写真のフィルムを通して通して当てられると、もとの物体の三次元的イメージがその背後に現れる。ハーネフラーフによれば、この技術は、ニューエイジ科学者およびニューエイジ信奉者の想像力をかき立てた二つの特徴をもつ。一つは、物体を周波数のパターンに変換し、また逆に周波数のパターンを物体に変換することが可能であることを、ホログラフィーが示唆しているからである。物体は潜在的に一見混沌とした周波数のパターンのうちに現前し、周波数のパターンは明らかに隠れた秩序、つまりその顕現した物体の根底にある深い構造とみなされうる秩序を蔵しているように思われるのである。第二に、物体とぼやけとのあいだに、単純な一対一の関係があり、ぼやけの各部分が、物体の対応部分を再構成するのに必要な情報をもっているというわけではないが、一方、フィルムが分割されても、各部分は完全な物体の再現に必要な情報をすべてもっているように思われることである。換言すれば、全体が各部分それぞれのうちに現前しているのである。このホログラム（ホログラフィーによる記録された干渉図形）の特性は、デカルト的ニュートンの世界観と結びつく絶対的空間の連続性に関する常識的な

仮説とは、両立しがたい。

いわゆるホログラフィー・パラダイムの擁護者によれば、現実にはホログラフィーの原理に基づいて構造化される。このパラダイムは、神経科学者カール・プリブラムと理論物理学者デイヴィッド・ボームがそれぞれの分野で発展させた理論に依拠して定式化されている。

まずプリブラムを見て行こう。プリブラムは、脳はホログラフィーの原理に基づいて記憶を蓄え则认为。これは、記憶の各断片は脳全体に配され、その結果、逆に脳の各部分は全体の情報をもつということを意味する。ホログラフィーの発明者、デニス・ガポールは、フーリエ変換という数学式を使用した。プリブラムには、脳は周波数を分析し、それをイメージに変換するのに同じフーリエ変換を使用しているように思われた。プリブラムにとって、この類似性は、知覚した現実が、ホログラフィックイメージに似た秩序をもっていることを示唆していた。つまり知覚した現実には、純粋な周波数の領域から脳によって創造された究極的には幻影的な亡霊なのである。われわれはここに、前述した幻影としての現実という見方にまた出会うことになるが、ハーネフラーフは、これに関し次のように述べる。しかしニューエイジ信奉者にとっては、これは禁欲的な彼の世性という伝統的な帰結はもたないのである。周波数の領域はしばしば神秘主義的状态において経験されるような統合化された現実と直接結びつけられる。しかしながらニューエイジ思想家によって引き出される典型的な結論は、人間としてわれわれの目標は、無定形の領域に永遠に住むことではなく、その領域の全体性が、日々の現実を生きるわれわれの生活の導きのモデルとなり、また靈感の源泉となることなのである。われわれの世界は断片的で、ばらばらであり、また究極的にはそれを根拠づけている全体性とは、位相が異なってしまったとみなされる。われわれの目標は、世界に意味を取り戻すことでなければならない。

ホログラフィー・パラダイムと結びつくもう一人の思想家は、ボームである。ハーネフラーフによれば、ボームの哲学的著作は、二つのはなはだ

異なった思想体系が収斂した産物と見なすことが出来る。第一は、ボームの理論物理学の著作であるが、それは、最初から、宇宙の全体性に対する根本的な直感に靈感を受けているようなところがあった。ボームは若いときから、自然科学と自然哲学との区別を決して受け入れなかった。初期の物理学理論がすでに後年の潜在的な秩序の哲学の萌芽をもっていたと考えられる。第二には、インド人思想家、ジッドゥ・クリシュナムルティに対する傾倒である。クリシュナムルティとの邂逅が、物理学理論と人間本性や文化の広範な問題との関係を探求するきっかけを与えたようである。それ以来、ボームの主要なテーマは、断片と全体性の問題となる。

ボームは、社会の断片化が間違った思考方法に起因すると信じていた。それが存在の全体性との接触をなくしてしまったからである。世界に全体性を取り戻すためには、人間は完全に新しく思考することを学ばなければならない。ところで精神の徹底的な再構築の必要性が、クリシュナムルティの中心的なテーマであった。ボームの特別な関心は、徹底的にホーリズムの思考を正当化し、かつそれを反映する哲学的な現実観、つまり自然哲学を発展させることにあった。堅固な概念的な枠組みを与えることによって、ホーリズム的思考を正当化する包括的な世界観が、古典的物理学に基づく機械論的な世界観のオルタナティブとして必要なのである。全体論的なパラダイムや世界観が、時代遅れとなった断片的なパラダイムに取って代わらねばならない。

しかしながら、ボームは単に、一つの理論を、他の理論に変えることによって世界に全体性が取り戻せるとは考えない。ある理論が、全体論的な思考を正当化し、社会に全体性の観念を行き渡らせることに成功するのは、まさにその理論の本性が首尾一貫とした全体論的な展望を反映し、またその本性が、その理論を用いる人々によって正しく理解される場合のみなのである。現在では、最も全体論的な理論といえども、さまざまな区別を導入するのは不可避である。もしこうした区別を、真の現実の姿を反映すると考えるならば、われわれは断片化が真の現実の姿であることを肯定

しているのである。したがって理論を一貫して全体論的に見るというものは、それらを現実の記述としてではなく、どんな顕在的な理論をも超越する現実に関しての一時的な洞察の形態とみなすことである。もし理論が単に洞察形態にすぎず、その有効性が理論が現実を明確化するその程度に依存するならば、現実がいかなるものかを確定するために、事実という言い方を持ち出すことは出来ないであろう。むしろわれわれが獲得する事実的な知識は、結局のところわれわれの理論によって作られ、形成されるのである。ボームは理論的洞察によってわれわれの知覚に導入される形態を、われわれの思考やものの見方からは独立した現実と見なすことを、決定的な誤謬と見なす。したがって世界にある断片化の事実を指摘することによっては、現実の全体性という公理を反証することは出来ないのである。

「ある人々はいうかもしれない。都市や宗教、政治システムの断片化、戦争、暴力行為、兄弟殺しなどに見られる対立葛藤が、現実である。全体性は理想である。われわれはそれに向かって努力しなければならない。しかしこれは私がここで言っていることではない。むしろ言われるべきことは、現実であるのは全体性だということであり、断片化は、幻影的な知覚によって導かれる人間の行為に対する、この全体の返答なのである。というのもこの知覚は断片的な思考によって形成されているからである。換言すれば、断片的なアプローチをする人間が、不可避免的にそれに相応した断片的返答によって答えられるというのは、まさに現実が全体であるが故なのである。したがって必要なのは、人間が自分の断片的な思考の習慣に注意を払い、それを自覚し、そうしてそれに終止符を打つことである。現実に対する人間のアプローチは、こうして全体的になるであろうし、それに対する答も全体的となるであろう。しかしながらこうしたことが生じるためには、人間が自分の思考活動に、つまり現在ある通りの現実の真なるコピーとしてではなく、一種の洞察、見方としての思考活動そのものに気づくことが、決定的なのである。」²³⁾

ハーネフラーフによれば、この箇所は、ボームの潜在的な秩序の理論を

正しく理解する上で重要である。つまり潜在的な秩序の理論というものは、現実の全体性というアприオリな仮説に基づいていることが、言われているからである。ボームによれば、ホログラフィーを潜在的な秩序理論にとって有効なものとする重要な特徴は、もとの物体の形態および構造が写真記録の各部分のうちに折りたたまれており、また逆に各部分から広げられるという事実である。ボームは、ここに機械論的な秩序とはまったく異なる新しい秩序形式の可能性を見る。つまり潜在的な秩序である。「潜在的な秩序という言葉で言われているのは、すべてのものは、すべてのもののうちに折りたたまれているということである。これは物理学において現在支配的な顕在的な秩序とは対照的である。そこでは事物は、それ自身の特定な空間（および時間）領域にのみ、そして他の事物に属する領域の外部にのみ存在するという意味において、展開されているのである。」²⁴⁾

しかしホログラフィーとの類似性で考えるだけでは、限界がある。つまりそれは静的なのである。こうしてボームは、動的である究極的な現実をホロムーヴメントと呼ぶ。このホロムーヴメントは、われわれの現実の全体を折りたたんだ（潜在的な）形で包含している。古典的な（機械論的な）物理学によって探求された経験領域は、この全体から広げられた特定の下位全体領域なのである。これが潜在的な秩序（ホロムーヴメントにおける周波数領域）の基本的な構図であり、ここから顕在的な秩序（つまりわれわれの世界）が広げられるのである。機械論の誤謬は、この顕在的な秩序、つまりおのおの分離し、独立して交互作用をする存在者からなる秩序が、根底的な現実であると見なしたところにある。機械論的な科学は、部分から出発して、全体をこの部分とその相互作用の言葉で説明しようとする。潜在的な秩序の言葉による科学的研究は、その反対に、宇宙の分割できない全体性から出発して、その仕事を、全体からの抽象化によって部分を導出することと定義する。ニュートン物理学は、顕在的な秩序を対象とする限りでは、それなりに有効である。しかしその限界は今や明らかである。ホロムーヴメントの法則は、機械論的ではない。そして潜在的な秩

序からわれわれの世界が展開される過程は、偶然的で、混沌としたものではなく、一定の秩序のもとにあると思われる。したがってこの過程の背後には、必然的な力が働いているに違いない。しかしこの必然性を決定している法則がなんであるかは、われわれにはわからないのである。

以上ボームの潜在的な秩序の理論の概略を見てきたが、ハーネフラーフは最後に、神とも結びつきうる究極的な秩序、存在の根底に関するボームの見方に、注目する。これはホロムーヴメントをも越え、絶対的な知性と関連づけられる。この知性の概念はクリシュナムルティに由来するものである。そしてボームは、この知性には、哀れみと愛が満ちているように思われる、と述べている。

ハーネフラーフは、プリブラムおよびボームのホログラフィー理論を以下のように要約する。両者のホログラフィー理論を総合すると、宇宙は全体が各部分において潜在化されており、その宇宙と同じ機能をもたせられた脳によって解釈されるのである。根源的な現実は、途切れない力動的な全体性の性格をもつ非局所的な周波数領域として描かれる。われわれが知覚する現実、この領域からわれわれの脳によって読み取られる（プリブラム）、あるいはホロムーヴメントの未知の法則に基づいてそれから展開される。ホロムーヴメントさえも越えて、知性、哀れみ、愛によって特徴付けられる究極の根底が存在する可能性がある。究極的な根底から展開する多くの秩序という構図は、宇宙的な相互関連性というよりは、究極的源泉のホーリズムに近いと言えるかもしれない。しかしボームは、一連の秩序は、存在論的に段階づけられた位階構造ではなく、抽象化のレベルを言うのであると主張する。ボームの秩序は、より高次であったり、低次であったりするのではなく、単に異なっているのである。ほとんどの人々は気づいていないが、根底の性質は、すべての存在者に浸透している。それはわれわれの世界を越えた究極的な現実ではなく、むしろこの世界で接近可能な精神の一つの状態と見なされるべきなのである。そしてそうした根底の覚醒というのは、特権的な神秘主義的経験ではなく、通常の実実の

真の深みに対して開かれている状態なのである。

d. シューマッハーとケン・ウィルバーの批判²⁵⁾

二元論と還元主義の克服を目指すホーリズムが、還元主義に陥る可能性をはらむという問題を、ハーネフラーフは認めている。この問題は、ハーネフラーフのニューエイジ論を考える上でも、重要であろう。以下、これに関する、シューマッハーとケン・ウィルバーの発言を見ておく。

『転回点』において、カプラは、経済学者 E. F. シューマッハーを訪問したときのことを述べている。自身の新しいシステム論を説明した後、シューマッハーと基本的には見解が一致すると信じていたので、カプラは肯定的な答を期待していた。しかしながらシューマッハーの答は、強い不同意であった。ハーネフラーフは、シューマッハーの答の要点を、次のように述べている。科学がわれわれの時代の諸問題を解決することは出来ない。というのも科学は存在のより高い、そしてより低いレベルの質的概念を包含することは出来ないからである。プートストラップ物理学もシステム論もただ現実の一つの基本的なレベルのみしか受け入れず、したがって結局のところそれらは還元主義的なのである。カプラ自身は、シューマッハーとの議論を次のように述べている。

「長く続いた議論の中で、シューマッハーは、根本的な位階的秩序を信じていると語ったが、それは四つの特徴的な要素、つまり物質、生命、意識、自己意識それぞれをもった四つの特徴的な要素、鉱物、植物、動物、人間からなっており、それらは各レベルがただ単にそれ自身の特徴的な要素を所有するだけでなく、また下位のレベルの要素をすべてもつという仕方で顕現するというものであった。もちろんこれは、存在の大きいなる連鎖という古代の観念であったが、シューマッハーは、それを現代的な言語で、またかなり精緻に語った。しかしながら、シューマッハーは、その四つの要素が、説明不可能で、何ものにも還元できない神秘的なものであり、またそれらの間の相違は、垂直的次元における根本的な飛躍、シューマッハーの言う存在論的な非連続性を表していると主張し、それゆえ物理

学は哲学的ないかなる衝撃をもちえないのだ、と繰り返して述べた。『それは全体を扱うことは出来ない。それはただ最も低次のレヴェルのみしか扱えないのだ。』これは実際、われわれの現実に関する見解における根本的の違いであった。私は物理学が現象の特定のレヴェルに限定されているということには同意したものの、さまざまなレヴェル間の相違を絶対的であるとは考えなかった。私はこれらのレヴェルが、本質的に複合性、つまりすべてが分離せずに、相互に結合し、相互に依存し合う複合性のレヴェルなのであると主張した。」²⁶⁾

ハーネフラーフは、この二人の議論のうちに、ニューエイジ思想における二つの相反する現実観、つまり一元的な現実観と位階的な現実観の間の根本的な裂け目を見る。そして前者が還元主義を回避することが出来るか否かが、両者の分かれ目であるとし、カプラが、還元し得ない神秘としてのそれぞれに異なったレヴェルというシューマツハーの見方を、明確に拒絶し、しかしこの拒絶が、文字通り還元主義への信念を暗に表明していることには、どうやら気づいていないようであると付言している。

ケン・ウィルバーは、ホログラフィー・パラダイムと科学・神秘主義並行論に対し痛烈な批判を行った。ハーネフラーフは、これは二つの点で重要であると見なす。第一に、それがニューエイジ運動におけるほとんど唯一の知的論難であるからであり、第二に、それが現実の本性に関する二つの主要なタイプの根本的な相違を明確に定式化しているからである。つまり現代物理学によって靈感を受けた一元論的なタイプと位階的、理想主義的タイプの相違である。ウィルバーは自然科学は、靈性に関し語る能力がない、と言う。ニューエイジ科学の一元論、それは還元主義に陥らざるを得ない。なぜならそれはすべての現実を、物理学に範をとった一つの基礎的な現実の言葉で記述しようとするからである。そしてそのオルタナティブとしてウィルバーは、高次のレヴェルが低次のレヴェルを包含するが、しかし低次のレヴェルは高次のレヴェルを理解することが出来ないような位階的見方を提出する。このウィルバーの批判は、前述したシューマツハ

ーの見方と類似していると言えよう。ハーネフラーフは、ウィルバーの位階的モデルを紹介しながら、この批判を詳述しているが、ここではウィルバー自身の言葉を聞いてみよう。

「新物理学はただ、それ自身のレベルがもつ一つの次元における相互浸透性を、発見したに過ぎないのである。これが重要な発見であるとはいえ、それを、神秘主義者たちが記述する多次元的な相互浸透性という驚くべき現象と等置することは出来ない。おおざっぱに言って、物理学の研究は、一階にあって、その諸要素の相互作用を記述するが、神秘主義者たちは六階にあって、一階から六階までの全体にわたる相互作用を記述するのである。さらに物理学と神秘主義は同じ現実に対する二つの異なったアプローチではない。それらは二つのまったく異なった現実のレベルに対する異なったアプローチなのであり、神秘主義のレベルは物理学のレベルを超越するが、しかしそれを包含するのである。一般化というショットガンを使って、物理学と神秘主義を結婚させるのに急なあまり、われわれは量子の現実というものが、さまざまな過程が肉眼で見える現実世界においては、いかなる関係ももっていないということを忘れがちである。……しかし神秘主義者がすべての物質の相互浸透性を見るのは、まさに岩や木々のある普通の領域においてなのである。神秘主義者と宇宙との根本的な一体性は、原子のレベルで始まるわけではない。神秘主義者が滝のような流れにかかっている枝の上に鳥を見て、それらは完全に一体となっている、と言うとき、それは、超顕微鏡を手に入れ、この状況を精査するならば、われわれは鳥と流れが統一的な仕方では中間子を交換し合っているのを見るだろうということを意味しているわけではない。ほとんどどんな物理学者であろうと、肉眼で見える木と鳥との関係は亜原子の粒子間関係と同じような濃度と統一性をもっているかと聞かれたら、否と答えるであろう。一方、神秘主義者の方は、然りと答えるであろう。これは根本的な問題であり、物理学者と神秘主義者は同じ世界について語ってさえもないのである。」²⁷⁾

4) 進化論的観点²⁸⁾

ニューエイジ思想の全形態は、少なくとも現実の本性に関し二つの一般的な仮説を共有している、とハーネフラーフは言う。第一は、現実が切れ目のない統合された全体をなすというものである。このホーリズム的仮説に基づき、いくつかの世界観が発展されうる。これらの世界観の文脈においては、断片化やさまざまな二元論の明らかな証拠は、通常意識や経験に接近可能な必然的に制限された知覚がわれわれに全体についての結論を引き出すに足る十分な証拠を与えてくれるという誤った仮説から本質的に生じるのである。そこに含意されているのは、全体そのものは、有限な知覚には必然的に接近不可能とならざるをえない（超常的な種類の意識や経験においては経験されうるとしても）、という考えであろう。全体から出発する包括的な観点からは、断片化と二元論の明白な場合もその絶対的な性格を失い、根底にある全体のただ部分的な顕現としてのみ見られ得る。現実が、限定された観点からは、ばらばらで断片的に見えようとも、全体的な観点からはより深い調和が出現するのである。ニューエイジの第二の一般的な仮説は、現実が進化の過程に従事しているというものである。ホリスティックな仮説が空間の統一性を強調するとするならば、進化論的仮説は時間における過程を強調する。

ところでハーネフラーフが強調するのは、ホーリズムと同様に、ニューエイジ進化論はまず現実についての理論と見なされるべきではない、ということである。それは、特定のホリスティックな理論が全体に対する最初のヴィジョンに理論的な土台を与えるために展開されたように、進化の理論も現在の現実がこれで完成されていることはあり得ず、未来が持続的な改善の約束を果たしてくれるという最初の感覚（とりわけますます大きな全体に向かう漸進的な運動という意味において）を説明するために形成されたのである。ホーリズムも進化論もヴィジョンとして始まり、そののち多くの理論を生み出すのである。

このニューエイジの進化論に関し、ハーネフラーフは、閉じられたシス

テムや開いたシステム、円環的タイプや直線的タイプといった概念を使って、その進化論のタイプをいくつかに分類し、それとホーリズムのいくつかのタイプとの関連を考察しているが、ここではプリゴジンの説とそのニューエイジ的解釈の代表と考えられるエーリヒ・ヤンチュの説を見て行くことにする。

プリゴジンの科学的著作の核にあるのは、存在を強調する古典的科学は、いまや生成を強調する新しいパラダイムによって取って代われねばならないという確信である。したがって、プリゴジンは永遠の法則や宇宙の調和といった信念に対し極度に批判的である。それに対しプリゴジンが強調するのは、時間、変化、偶然性、未来の予見不可能性である。『混沌から秩序へ』の最後でプリゴジンは次のように語っている。「われわれがこの著作において多くのスペースを与えた観念—不安定さ、変動の観念—は、社会科学の中に広まっている。われわれはいまでは、社会というものがきわめて複合的なシステムで、それは人類の歴史において比較的短期間に進化したさまざまな文化によって示されるような潜在的に膨大な数の分枝を包含することを知っている。またわれわれはそのようなシステムが変動にひどく敏感であることも知っている。このことは希望と脅威の両方に通じるのである。どんな小さな変動でも大きくなり、全体の構造を変えるかもしれないがゆえに、希望がある。したがって、個人の活動は些細な意味ないものに運命づけられているわけではない。他方、脅威もまたある。われわれの宇宙では安定した永遠の法則は、永遠に過ぎ去ってってしまったかのであるからである。われわれは、盲目的な確信を抱かせることはない危険で不確かな世界に生きているが、それは、ただタルムードのある箇所が創世記の神に帰したと同じ条件付の希望の感情を抱かせるのである。『現在の創世記の前には、二十六回の試みがなされ、そのすべては失敗に帰した。人間の世界はこの先行する残骸の混沌とした内奥から生じたのである。神もまた失敗の危険に、そして無への退却にさらされている。それがうまく働くのを願おう、と、世界を創造したとき、神は叫

んだ。そしてこの希望は、世界と人類の以後の歴史について回ることになったが、それははじめからこの歴史には極端な不安定さというしるしが刻印されていることを強調するものだったのである。」²⁹⁾

ハーネフラーフによれば、この引用文はニューエイジ思想家たちがなにゆえにプリゴジーンに魅せられたのかということばかりでなく、またなにゆえにある点までしかプリゴジーンに従わなかったかを説明する。その魅力は、人間が今一度意味ある役割を担いうる無限で、開かれた進化する未来というヴィジョンに感じる高揚感からやって来る。人間活動が引き起こすようなものも含む小さな変動が、危機的状況を越えて、進化を全体として予見しがたい新しい進化の方向へ推し進めるかもしれないという観念は、ニューエイジの根底にある関心事に強く訴えるものがあつた。こうした関心事の一つが、水瓶座の時代への希望である。一般的に言って、この理論は、自然の諸過程において、それが人間を受動的なものの役割から、能動的な行為者の役割へと高めることに、またどんなに小さな部分一個人でさえ、全体に影響を与えうるというところに魅力があつた。しかしながらプリゴジーンの思想の当惑させる点は、自己組織化の過程は、因果的でも、目的論的でもないということである。したがってそれはいついかなるときであろうと、失敗の可能性を含んでいるのである。ニューエイジ運動においてプリゴジーンの人気が、進化論的ヴィジョンがもたらす高揚感にある一方で、そのヴィジョンがもたらす不安定さの方は、その信奉者たちによって軽視され、曖昧にされたのであつた。こうした傾向は、ヤンチュの著作において大変明確に現れている。

ヤンチュは、科学的理論と幻視的な熱狂との奇妙な混合である『自己組織化の宇宙』において、さまざまな目的論的要素を密かに再導入することにより、プリゴジーンをはるかに超えてしまっている。こうした目的論的要素は、随所に見られるものの、この本の最後において、明瞭な目的論的言明にきわめて近づく。「自己超越において、意識の和音はより豊かになる。無限なるものにおいて、それは神的なるものと一緒となる。しかしな

がら神的なるものは人格的形態や他の形態のうちに顕現するのではなく、多次元的現実の進化的ダイナミクス全体において顕現するのである。」³⁰⁾ 潜在的な直線的目的論的進化論との類似性は、さらに意識の原初的な形態はどんなに小さな化学構造や単細胞にも認められねばならないという発言によって、強化される。これは精神／意識へと向かう傾向が、進化には最初から含まれていると言うのに等しいであろう。

論理的な終わりのないプリゴジーンの進化論にもかかわらず、目的論的モデルの魅力は、全体として、ニューエイジ信奉者には強すぎた。プリゴジーンの‘危険で不確かな世界’は、プリゴジーン自身の理論を用いて、宇宙の諸次元の超意識性への不可避的進歩の世界へと変容された。

このようにプリゴジーンとそのニューエイジ的解釈者ヤンチュの説を対比させつつ、ハーネフラーフは結論として、次のように述べる。終わりの開かれていることと目的論的な方向性との特異な結合は、ニューエイジ文献においてしばしば見受けられる。そこにおいて中心にあるのは、進化の意味は、それに固有な創造性という価値にあるという確信である。宇宙はよりいっそう壮麗な創造へと展開するために存在する。無限の創造性が、進化の最初であり、手段であり、目的なのである。人間の意識は、この過程において決定的な役割を果たすよう定められている。ヤンチュのような専門的な科学者でさえ、まさにこの創造性のダイナミクスを〈神〉と結びつけることは、抗しがたいようである。神（あるいは、セスの言うあるところのすべて）は、純粋に創造的なエネルギーである。そして人間は、神の共同創造者として、この神性に与る。進化は神の無限な拡張の過程なのである。

5) 宗教の心理学化と心理学の神聖化³¹⁾

たしかに超経験的な事柄の対する伝統的な信仰は、心理学的なメカニズムから帰結すると説明する議論は、現在では珍しいことではない。古代の人々の信じた神々は人間精神の単なる投影であることが判明した。人間が神々を創造するのであって、その反対ではない。またそれは伝統的には、

無神論のための論拠とみなされた、ということも言えよう。というのもそれが形而上学的な現実には精神の内的ダイナミクス以外の何ものでもないことを示唆しているからである。ところでハーネフラーフによれば、ニューエイジ運動に関してきわめて重要な事実、それが一般的に議論の道筋は受け入れるが、しかし無神論的な結論は拒否するという点である。これはただ、投影理論によって暴かれた‘人間的な、あまりに人間的な’神（ないしは神々）が、真の神的存在と何らかの関わりを持つということを否定することにより、なされる。真の神はただ人格的／非人格的の枠組みを超越するだけでなく、客観的形而上学的現実を精神に属する単なる主観的な印象から区別する存在論的な枠組みをも超越するのである。換言すれば、無神論的結論は、密かな二元論的前提を示す。つまりそれは客観的現実と主観的な経験の区別が絶対的であり、そうした区別は究極的な現実に根ざしているということ、自明なこととみなすからである。こうした前提がなければ、精神と神、しかしまた精神と世界との関係は異なった光の下に見られ得る。つまり現実と「単なる想像力」との常識的な区別を自明と見なすことはもはや不可能なのである。こうした広く行き渡った二元論の形式を克服するような新しい枠組みが必要とされるのである。

ところでスタニスラフ・グロフは、『脳を越えて』において、変性意識状態調査（夢、薬物による幻覚、トランスなど通常の覚醒意識とは異なる意識の状態）の経験的結果は、ニュートンのデカルト的パラダイムとは両立しがたいと述べるが、ハーネフラーフはここに、主観的に真なると経験されるものは、どんなものでも真なるものと見なされねばならない、という根本的な信条を見る。そしてこうした信条を基礎にすれば、現実と想像世界との区別は、認めがたく、個人的な経験が、現実判定の唯一、独占的な基準となることを指摘している。まさに「私が経験することは何であれ、真なる現実」なのである。

ハーネフラーフは、トランスパーソナルな経験（変性意識状態、トランス状態）を霊的世界観の経験的基礎とみなすことを、宗教の心理学化と心

理学の神聖化の端的な一例と考える。トランスパーソナルな経験の擁護者は、宗教的な存在は、すべて精神のうちにあると考え、さらに精神のうちにあるものは何であれ真なるものだと主張する。この信念は、セスのホログラフィックな世界観とそしてまたその多くのニューエイジ的流れと完全に両立する。そこでは客観的な現実と（夢、トランス状態、過去の生の記憶）主観的な現実との本質的な相違が完全に消失しているからである。また精神の主観的な領域と新物理学によって探求されている客観的な領域が実際は同じものであるする傾向も見られる。これは並行論の副産物である。人間精神が、神秘主義によって経験され、いまや物理学によって再発見されている宇宙の精神の一部であるとするなら、心理学と物理学の区別は認めがたいものとなる。

こうした傾向を最も端的に表しているのが、‘われわれ自身の現実を創造する’という言葉である。こうした表現はレトリックの一種と見なされがちであるが、ハーネフラーフは、この背後に一貫した信条体系を認める。‘われわれ自身の現実を創造する’という信条は、二つの信条から形成されている。第一に、われわれの世界ないしはわれわれの宇宙は、実際には、神によってではなく、われわれ自身によって創造された。もとの本来の状態、つまりわれわれがまだ純粋な霊的存在であったとき、われわれは天と地を造ったのである。しかしながら、われわれは自分自身の創造において道を見失ってしまったのであり、最初の状態に戻るために道を探そうと苦闘している、という信条である。第二に、われわれはこの世に生を受ける前にわれわれの現在の生の状態を選択した。したがってわれわれの生はわれわれの創造である、という信条である。これらに関しては、ハーネフラーフは、それぞれ詳細に検討しているが、ここではこの信条の動機づけに関し見て行こう。‘われわれ自身の現実を創造する’という信条から容易に感じられるのは、それは結局一種のエゴイズム、独我論、ナルシズムと他ならないのではないかということである。しかしハーネフラーフは、この信条の根底に、ニューエイジ信奉者の、人間存在に意味を取り戻

したいという強い希求を見る。つまり‘われわれ自身の現実を創造する’
という信条は、根本的には、生が偶然的で無意味であり、人間は本質的に、自然や社会の非個人的な諸力の受動的な犠牲者であるという観念に対する反動なのである。ニューエイジ信奉者にとって、われわれ自身の現実を創造するという事は、人間生活のすべてが深い意味をもつことを肯定することに等しい。すべてのことは理由があって起こるのであり、われわれにはこうした理由を理解することが可能なのである。

ところでルイズ・ヘイは、私を含めすべての人は、われわれの人生におけるすべてのことに百パーセント責任があると思う、と述べる。こうした考えは耐え難い罪の感情を作ると主張する批判者とは反対に、多くのニューエイジャーはそれが力を与える信念だとみなす。これはまず何よりも、われわれのコントロールを越えた力によってわれわれの生が操作されているという無力を覚えさせる観念とは正反対の考えである。もしわれわれが状況を変える力がなく、われわれ自身ではなく、他の人々や環境に責任があると考えれば、実際われわれはそれらの人々や環境に自分の力を渡し、そうして自分を弱体化してしまうことになる。われわれが無力だという観念は、まさしく客観的な真実という仮面をかぶった信念なのである。こうした信念が受動的態度をはぐくみ、不毛な精神を作り出すのである。つまりわれわれは、それをわれわれ自身を変えなかったことに対する安易ないいわけにしてしまうからである。いったんわれわれの生が変えられ得ると信じ、その信念のもとで行動するならば、外的な束縛というものも、思ったほど絶対的なものではない。自分の生に対して‘責任をとる’ということは、ニューエイジ思想によれば、人生の幸福や成功のために、われわれが他人や外的な環境に依存するという観念との完全な決別を意味する。第二に、この自己責任の態度は、またわれわれの生に意味を取り戻すことによって、力を与えることが出来る。生が意味をもたないということは、まさに制約を与え、無力化する信念である。われわれがわれわれ自身の現実を創造したならば、われわれはそれを鏡として用いることが

出来る。それらを世界のせいにする、かわりに、なぜ、不快で、明らかに意味のない、あるいは不公平なことがわれわれに起きるのかを自問することが出来るであろう。次に一見ばらばらで無意味な出来事のうちに、こうした出来事を引き起こしたわれわれ自身の思考や行動の中にある感情のパターンを発見するかもしれない。こうしてわれわれの生のすべての環境は、無関係な偶然の所産ではなく、われわれ自身に対して意味のある教訓となるのである。

しかし以上の信念は、実際には、ニューエイジャーならずとも、誰でも、ある程度は、理解でき、また実践しているところであろう。ハーネフラーフによれば、両者の違いは、その極端さ、徹底さである。われわれはわれわれの現実をすべて創造し、われわれに起きることはすべてわれわれ自身にとって深い意味をもつのである。われわれ自身で完全な現実を創造するというわれわれの能力に実際には制約があるのは、ある時点における自己認識と自己理解に制約があるからである。われわれの生における否定的な状況は、頑固な制限的な信念や解体されていない感情的なパターンを反映する。こうした妨害の石の除去は、困難な仕事である。こうしたことから、われわれ自身の現実を創造するという事は、内的な、心理学的探求と分かちがたく結びついている。ニューエイジの意味における霊的成長とは、われわれの誰もが、精神療法士であるような現在進行中の個人的精神療法と性格づけられであろう。そして創造のための無制限の自由が、約束された目標なのである。こうして生まれ変わりがこの過程の不可避的で統合的な部分となる。ニューエイジ信奉者はたしかに、人生におけるさまざまな環境（性、親、国、社会的状況、生まれつきの能力、遺伝的な病気や障害を含む不能など）がすでに誕生時において存在していることは否定しない。しかしながら、こうした環境は、われわれの個人的な発達に必要なものとして、誕生前にわれわれによって意識的に選択されたと広く信じられているのである。われわれの人生に責任をとるということは、もはやわれわれの人生に何らかの反感をもつことではなく、人生すべてを

意味あるものとして受け入れ、それを成長のために差し出されたきかいとして建設的に利用するということを意味する。一般的に、そしてまた根本的な前提を考慮すれば当然のことながら、類似の議論が、自然災害やジェノサイドなどにも適用される。制約ある人格にとっては明確ではないが、しかしより高い自己にとっては明瞭な目的のために、犠牲者はこうして殺されるという経験を持つことを選んだのである。こうして‘われわれ自身の現実を創造する’という信条のもつ極端さを、われわれは知ることになる。

ところでこうした考えの延長にある‘われわれが病気を創造したのである’という信条は、とりわけ医者や患者から強い反発を受け、ニューエイジャーと批判者の間で激しい論争が生じたのであった。ハーネフラーフはこれに関しては、その議論が表面的なレベルに終始し、世界観をめぐる根本的な論議になっていないことを、遺憾としている。

以上見てきたように、経験から学び、制限的な感情的パターンを解体することは、完全な現実を創造する過程の重要な一部である。こうした制限的な感情パターン、信念というものは、文化的伝統によって形成されている。ハーネフラーフは、こうした制限的な信念として、三つのものを挙げている。まず第一は、人間が、環境に左右される本質的に無力でよりどころのない犠牲者であるという信念である。第二は、西洋の宗教的遺産に主によるのであるが、人間がさまざまな欠陥をもつ、罪ある存在であるという信念である。さらに時代遅れとなった科学観を反映するものであるが、世界というものは、単なる主観的な精神が影響を与えることが出来ない非人格的で客観的な法則に基づいて動いているという信念である。ニューエイジャーは、現代の西洋文化によって強化されたこうした信念に対し、それらが個人の拡張に対し否定的、悲観的、制限的である点に不満を覚え、それらを解体しようとするのである。それらは現実には何もないところに、制限や束縛を設けてしまっているからである。こうした信念に対するオルタナティブは、したがって大いに肯定的、楽観的、拡張的なもの

とならなければならないであろう。

以上、第二部のほんの一端を紹介してきただけであるが、ニューエイジ宗教が、西洋文化の支配的な価値観に対する文化批判的な性格をもっていることはたしかであろう。ハーネフラーフは、結論部において明確に、述べている。「すべてのニューエイジ宗教は一方で教条主義的キリスト教、他方で合理主義的科学主義的イデオロギー（と自分たちに感じられるもの）に代表されるような（近代）西洋文化の二元論的還元主義的傾向に対する批判によって特徴づけられる。それは宗教や霊性を、また科学や合理性を拒否するわけではないが、しかしそれらを高次の総合において結合する第三の選択肢があると信ずる。それはこれまで西洋文化を支配してきた二つの流れ（つまり教条主義的キリスト教と等しく教条主義的合理主義的科学主義的イデオロギー）が現代世界の危機を作り出したということ、またこの危機は第三の選択肢が社会において支配的になるときにのみ解決されるであろうことを主張する。」しかしながら文化批判的な性格が、ニューエイジ宗教に固有なものであるとしても、こうした批判的性格をもっているものがすべて、ニューエイジ宗教となるわけではないという反論が言われるかもしれない。その意味では、こうした性格付けだけでは、ニューエイジ宗教の境界付けとしては、不十分と言うことになるだろう。これに対し、ハーネフラーフは、ニューエイジ宗教の本性はさらに西洋文化の批判を明確化し、オルタナティヴを提出するためにニューエイジ宗教が依拠する特定の伝統、つまりエソテリシズムとの関係において境界づけられ得ると、考えるのである³³⁾。

注

- 1) Hanegraaff, Wouter J., *New Age Religion and Western Culture — Esotericism in the Mirror of Secular Thought*, Brill: Leiden 1996.
- 2) *Ibid.*, 365-366

- 3) Ibid., 113-119
- 4) Lovejoy, Arthur O., *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*, Harvard Univ. Press: Cambridge etc. 1964, 25-26
- 5) 心理学者の Helen Schucman が、幻視や内なる声の発言を記録したものの。
- 6) Hanegraaff, 119-120
- 7) Hanegraaff, 120-127
- 8) Lovejoy, 315
- 9) Hanegraaff, 126
- 10) Hanegraaff, 128
- 11) Hanegraaff, 128-132
- 12) Capra, Fritjof, *The Tao of Physics: An Exploration of the Parallels between Modern Physics and Eastern Mysticism* (1975), Flamingo. Fontana: Glasgow 1983
- 13) Ibid., 92-92
- 14) Capra, *Uncommon Wisdom: Conversations with Remarkable People* (1988), Flamingo. Fontana: London 1989, 74
- 15) Hanegraaff, 132-139
- 16) Capra, *The Turning Point: Science, Society, and the Rising Culture* (1982), Bantam Books: Toronto etc. 1983, 265
- 17) Ibid., 266
- 18) Ibid., 266-267
- 19) Ibid., 290
- 20) Ibid., 280
- 21) Ibid., 292
- 22) Hanegraaff, 139-151
- 23) Bohm, David, *Wholeness and the Implicate Order* (1980), Ark : London & New York 1983, 7

- 24) Ibid., 177
- 25) Hanegraaff, 132, 176-181
- 26) Capra, *Uncommon Wisdom*, 228-229
- 27) Wilber, Ken, *Eye to Eye: The Quest for the New Paradigm*, Expanded ed. Shambala: Boston & Shatesbury 1990, 135-137
- 28) Hanegraaff, 158-168
- 29) Prigogine, Ilya & Stengers, Isabelle, *Order out of Chaos: Man's New Dialogue with Nature* (1984), Fontana: London 1985, 313
- 30) Jantsch, Erich, *The Self-Organizing Universe: Scientific and Human Implications of the Emerging Paradigm of Evolution*, Pergamon Press: Oxford etc. 1980. 308
- 31) Hanegraaff, 224-244
- 32) Hanegraaff, 517
- 33) Hanegraaff, 517